今月の
選者

岡本 真 (アカデミック・リソース・ガイド株式会社代表取締役／プロデューサー)

ウェブプロデュースの観点から図書館に迫る

情報管理 53(5), 286-289, doi: 10.1241/johokanri.53.286 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.53.286>)

ウェブを中心にサービスやイベントのプロデューサーを^{なりわい}生業としている立場から、これからの図書館のウェブサービスを考える際に役立つと思われる本を数冊紹介してみたい。

と言っても、ウェブプロデュースという言葉から期待されるような本の紹介ではないかもしれない、とあらかじめ述べておこう。

『ウェブがわかる本』大向一輝

岩波書店 (岩波ジュニア新書), 2007年,
987円 (税込) <http://www.iwanami.co.jp/BOOKS/50/4/5005620.html>

岩波ジュニア新書と聞くと、本誌の読者であれば、条件反射で中高校生向きとってしまうだろうか。もし、そうならそれは速断であり、あまりにももったいない。本書が刊行されてから3年。その間、連

日のようにウェブ関連の本が出版されている。だが、いまウェブについて知ろうと思ったときに最初に読むべき1冊として本書を超える本はないというのが私の実感だ。

著者は国立情報学研究所 (National Institute of Informatics: NII) でウェブ研究に携わるのと同時に、本誌読者の多くが活用しているであろうCiNii (NII論文情報ナビゲータ) <<http://ci.nii.ac.jp/>> の開発・運用にも当たっている人物だ。ここ2, 3年, CiNiiがその使い勝手を目覚ましく上げていることは、多くの方がご存知だろう。実際、現在のCiNiiはちょっとした商用サイトを大きく超える利用者を得ているのだ。こう聞くだけで、本書を手に取りたくなったのではないだろうか。

さて、本書はタイトルが示す通り、「ウェブとは何か」という極めて基本的な、しかし基本的であるだけに実は答えにくいテーマを正面から扱っている。ウェブの基本的な性格 (第1章) から、ウェブの歴史的な変化 (第2章) を経て、ウェブの仕組み (第3章) を説明した上で、ウェブを使ったレポート作成 (第4章) やウェブとのつきあい方 (第5章) を論じていくのだが、相当重厚な内容を実にわかりやすくかみ砕いている。特にウェブが何であるかという説明 (第1章～第3章) で終わらず、ウェブとどう相対するか (第4章, 第5章) に踏み込んでいる点に注目してほしい。実はこういうスタイルを徹底できている類書はそうはない。

別にウェブに限らないが、本来、それが何であるか、

ここで言えばウェブが何であるかを人に説明できるほどにきちんと理解していて初めて、ウェブとのつきあい方を語れるものだ。図書館に限らないが、ウェブサービスを企画・設計する上で、そのサービスと利用者がどうつきあっていくかを見定めていくことは欠かせない。しかし、そのためには、そもそもウェブとは何であるかを整然と説明できるくらいの理解が必要だ。この点で自分に万全の自信が持てなければ、ぜひ虚心坦懐にまずは本書を何度も読むことをおすすめしたい。

『社会的ジレンマのしくみー「自分1人ぐらの心理」の招くもの』山岸俊男
サイエンス社、1990年、1,523円（税込）

http://www.saiensu.co.jp/?page=book_details&ISBN=ISBN978-4-7819-0597-6&YEAR=1990

ウェブ本から一転して、次は社会心理学の研究成果を凝縮した本である。ウェブプロデュースの観点と言いつつ、なぜ社会心理学と思う方もいるかもしれない。しかし、ウェブサービスを作り上げる過程で一番大切なのは、プログラミングやデザインの知識ではない。また、どうやってビジネス的に成功させるかというノウハウでもない。もちろん、これらの知識やノウハウが無駄なわけではない。しかし、こういったアレコレが生きてくるのは、作り出すサービス像が確固たるものになってからの話だ。

本書は私がかつて在籍していた会社で、Yahoo!知恵袋 <<http://chiebukuro.yahoo.co.jp/>> というQ&Aサービスを企画・設計した際に、徹底的に読みこんだ本の1冊である。すべてとは言わないが、相応の利用者を得ているウェブサービスが、その他大勢のサービスと際立って異なるのは、極めてベーシックなところで、サービスの機能や利用者の行動をモデル化できているところだ。その上で、その基本モデルに基づき、将来サービス上で起こるとされる問題を事前に洗い出し、その対策を事前に機能やルールとして盛り込んでいる。

例えば、Yahoo!知恵袋の場合、数万人から数十万人、ゆくゆくは数百万人、数千万人が利用するようになった際、本書の副題のように「自分1人ぐらの心理」で他の利用者にとってメリットのない行為、いや下手をすると明確にデメリットとなる行為に走る利用者が必ず現れるとあらかじめ想定できていた。つまり、大規模なQ&Aサイトでは、必ず「社会的ジレンマ」と呼べる現象が起こることをあらかじめ認識していたのである。そこで生きたのが本書に代表される社会心理学の研究だ。本書の中で紹介されている社会的ジレンマ問題の解決を目指して行われた数々の研究成果から学びえた知見は、Yahoo!知恵袋というサービスの機能やルールに少なからず反映されている。

本書や、同じ著者による『信頼の構造』（東京大学出版会、1998年）、『安心社会から信頼社会へ』（中公新書、1999年）、『社会的ジレンマ』（PHP新書、2000年）を読みつつ、Yahoo!知恵袋の機能やルールを分析的な視点で見えていくと、ウェブサービスの企画・設計の具体的なヒントが見えてくるのではないかと思う。もちろん、本書は一つの例にすぎないが、図書館に関わる何らかのウェブサービスをプロデュースしようと思った際は、少なくとも表面的にはウェブと離れたところにある本書のような骨太な研究成果にふれることをすすめたい。

『フリー 〈無料〉からお金を生み出す新戦略』
クリス・アンダーソン著；高橋則明訳
NHK出版，2009年，1,890円（税込）

<https://www.nhk-book.co.jp/shop/main.jsp?trxlD=C5010101&webCode=00814042009>

最後に，昨年末からベストセラーとなっている注目の1冊を挙げたい。本書の著者であるクリス・アンダーソンは「ロングテール」という言葉を広めたことで名高く，ご存知の方も多いだろう。

本書では，21世紀に入ってから，特に顕著に見られるようになった商品やサービスが無料で提供される経済のあり方（フリーのビジネスモデル）が詳細に分析されている。フリーのビジネスモデルは，（1）直接的内部相互補助，（2）三者間市場，（3）フリーミアム，（4）非貨幣市場の4つに大別され，前2者は現在のようなデジタル時代以前から存在するものの洗練され進化したものと，後2者はデジタル経済とともに出現したものと位置づけられている。

本書の詳細な内容紹介に入るのは本意ではないのだが，非常に重要と思われる1点にだけふれておこう。クリス・アンダーソンは，21世紀のデジタル経済においてフリーが新たな経済のモデルになると説いている。その際，現在の経済はモノの経済である原子（アトム）経済から，情報通信のビット経済に移り変わっていると見立てており，この見立ては本書における彼の主張を支える骨子となっている。と

いうのも，デジタル情報技術によるビットの経済においては，商品やサービスの開発コストは極限まで下がり，それゆえに無料という経済モデルが成り立つ素地があると考えられるからだ。この指摘は，ウェブサービスに限らず，これからの図書館のサービスを考える上でも重要ではないだろうか。

今年2010年は日本における電子書籍元年と叫ばれている。事実，連日のように電子書籍がらみのニュースが飛び交っている。日本における電子書籍の行く末が今後どのようなプロセスを経ていくにせよ，早晚，本の世界も本という物理的媒体に制約された原子（アトム）経済から，デジタル情報のビット経済へと少なからず移行していくだろう。出版産業からの大きな反発は容易に予想できるが，クリス・アンダーソンのフリー仮説が正しければ，本や雑誌のようなコンテンツにもフリー経済の波は押し寄せてくる。そのとき，これまで物理的な本や雑誌を収集・提供してきた図書館には，どのような役割が求められる

執筆者略歴

岡本 真（おかもと まこと）

1973年生まれ。アカデミック・リソース・ガイド株式会社代表取締役／プロデューサー。1997年，国際基督教大学（ICU）卒業。1999年～2009年までヤフー株式会社にて，Yahoo!検索，Yahoo!知恵袋，Yahoo!検索ランキング，Yahoo!ラボ等の企画・設計・運用に従事。併行して，1998年にインターネットの学術利用をテーマにしてメールマガジンACADEMIC RESOURCE GUIDE（ARG）を創刊し，以来，編集長を務める。2009年，ヤフー株式会社を退職し，アカデミック・リソース・ガイド株式会社を設立。

その他，京都大学，国立情報学研究所，東京大学，早稲田大学，大妻女子大学等で非常勤講師や非常勤研究員を務める。情報処理学会データベースシステム研究会幹事，同人文科学とコンピュータ研究会運営委員。

れるのだろうか。

もちろん、本書の主張を肯定するか、否定するか、その態度によってこの問いへの答え方は異なってくるだろう。だが、いたずらに否定に走るのではなく、もし、本書の主張通りに大きな転換が訪れていると

仮定してみた場合、どのような図書館サービス、あるいは図書館のウェブサービスを描き出し、創り出せるのか、思考のトレーニングとしてでも取り組んでみたほうが、今後の図書館にとってより有用ではないだろうか。